

冬型気圧配置の出現頻度とその特性*

—気圧配置型ごよみ (2)—

吉野 正 敏**

要 約

冬型気圧配置, いわゆる西高東低について, 1907年7月から1967年6月までの60年の毎日の天気図から, 出現頻度の統計を行った. 累年の出現日数・月別出現日数・半旬別出現日数・日別出現日数などについてまとめた結果, (1) 最少の冬で33日, 最多の冬で67日出現する. (2) 平均では年49.5日. (3) 1月21~25日の半旬は50%以上の出現率となる. (4) 2月5~9日の半旬はめだって出現しにくい. (5) 冬型出現のシンギュラリティーが認められる, などのことがわかった. また, 関連する500mb面の特徴としては, 次のことが認められた. (6) 冬型が卓越する季節は, 500mb面で谷が130°Eから140°Eに移った半旬に始まり, 30°N~50°Nの高度差の大きい値が160°Eに現われたときに終る. (7) 冬型が卓越する半旬の500mb面, 50°Nの東アジア平均の帯状示数は, まったく現われない半旬より小さい.

1. ま え が き

気圧配置型ごよみの第1報としては, 1956~1965年の10年間の毎日の気圧配置型を分類して, その半旬ごとの出現頻度をまとめた(吉野・福岡 1967). 今回の第2報には, 冬型について60年分の調査結果を報告する. 西高東低の冬型気圧配置は, わが国の冬の気候を支配し, きわめて重要であるにもかかわらず, これまで, その出現の状態については意外と詳しい調査がない.

月別の統計としては高橋浩一郎(1955), 奥山 巖(倉嶋 1966)などがあり, 気団ごよみとしては荒川・田原(1948)の調査がある. これらの結果からは, 年変化についてはわかるが, 半旬別, または日別の出現状態についてはわからず, また, 出現頻度の長期変動などについても調査されていない.

今回の報告は, 出現頻度の集計結果の記述と, 若干の議論を付け加えたものである. 総観気候学または長期予報の資料のひとつとなれば幸いである. なお, 集計などの作業には菅沼繁君の助力に負うところが多い. 記して感謝する次第である.

2. 資料および整理の方法

今回扱った西高東低型の冬型気圧配置は, 前報(吉

野・福岡 1967)の気圧配置型ごよみではI型としたものである. 気圧配置については説明するまでもないと思うが, シベリアに高気圧があり, アリューシャン方面に低気圧がある場合で, 日本海側に季節風をもたらし, 太平洋側, 特に関東平野には空っ風が卓越する. シベリア高気圧がかなり南に偏り, あるいは低気圧が北日本の東方にまで南偏した場合も, この型に含まれている.

使用した天気図は1907~1950年については, 中央气象台(1951):縮刷極東天気図, 1951~1955年については, 中央气象台(気象庁):気象要覧(毎月)の付録天気図, 1956~1965年については半井範明(1966):天気図10年集成(日本気象協会), 1966~1967年については天文と気象(月刊)付録の天気図である. これらのペーパーマップで不明な場合は, 印刷極東天気図, その他の天気図を補助的に参考にした.

この60年間の毎日について, 冬型の出現日のリストを作った(吉野 1967). ここでは, このリストから, 以下のいくつかの表を作製した.

3. 結 果

(a) 累年出現日数

まず, 月別にその出現日数を集計すると表1の通りである. この結果によると, 冬型の気圧配置は60年間の平均で一冬に49.5日出現する. いわゆる南高北低の夏型気圧配置は同じく60年間の平均で25.2日(吉野 1968 b), これと比較していちじるしく多く, 2倍に達する. このことは, わが国における冬の季節風の影響がいちじ

* On the Occurrence Frequency of Winter Pressure Pattern and its Relation to the 500 mb Level Characteristics.

** M.M. Yoshino: 法政大学地理学教室
—1968年9月4日受理—

表1 冬型気圧配置の1907年7月～1967年6月の月別累年出現日数

	1907 1908	1908 1909	1909 1910	1910 1911	1911 1912	1912 1913	1913 1914	1914 1915	1915 1916	1916 1917	1917 1918	1918 1919	1919 1920	1920 1921	1921 1922	1922 1923	1923 1924	1924 1925	1925 1926	1926 1927
7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	2	2	0	0	2	1	4	3	3	1	1	3	1	4	3	1	1	5	5	2
11	4	7	4	8	4	8	9	4	5	3	10	8	4	5	8	7	4	7	4	9
12	12	12	10	11	15	9	8	12	8	7	20	10	11	9	8	18	12	11	9	11
1	13	13	7	7	17	14	12	12	16	15	18	15	13	17	18	15	11	18	12	16
2	17	11	17	13	9	13	9	6	15	14	7	4	13	13	5	10	14	13	9	14
3	5	3	5	1	6	10	3	1	8	6	5	4	3	10	3	2	10	7	3	6
4	2	0	0	1	4	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2	0	1
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	55	48	43	41	57	56	45	39	55	46	61	45	45	58	45	54	52	63	42	59

	1927 1928	1928 1929	1929 1930	1930 1931	1931 1932	1932 1933	1933 1934	1934 1935	1935 1936	1936 1937	1937 1938	1938 1939	1939 1940	1940 1941	1941 1942	1942 1943	1243 1944	1944 1945	1945 1946	1946 1947
7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10	3	3	2	2	2	2	2	4	0	2	3	0	3	0	2	3	3	2	1	2
11	7	5	5	10	3	3	4	8	6	3	5	10	7	6	3	8	3	2	4	4
12	8	16	8	11	12	8	12	10	16	10	11	15	13	14	7	8	12	16	14	13
1	12	19	21	12	6	17	18	10	21	11	13	12	18	9	14	21	17	19	13	13
2	10	14	9	7	12	8	17	12	12	2	12	11	11	8	11	12	8	15	8	14
3	8	9	4	4	5	5	7	6	8	5	3	5	4	2	1	8	3	8	4	4
4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	49	67	49	46	40	43	60	50	63	33	47	53	56	39	39	60	47	63	45	51

	1947 1948	1948 1949	1949 1950	1950 1951	1951 1952	1952 1953	1953 1954	1954 1955	1955 1956	1956 1957	1957 1958	1958 1959	1959 1960	1960 1961	1961 1962	1962 1963	1963 1964	1964 1965	1965 1966	1966 1967
7月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0
10	5	3	1	2	2	3	2	3	4	1	1	1	4	1	4	2	3	0	0	2
11	9	14	6	7	7	5	8	4	4	9	4	7	6	2	8	3	5	6	7	3
12	14	8	9	10	11	14	10	13	12	15	9	11	8	16	14	4	6	10	10	10
1	12	15	10	15	11	17	7	18	11	15	11	11	17	12	20	22	11	11	13	16
2	13	10	12	7	9	12	6	12	9	8	6	7	10	10	12	11	13	8	9	9
3	8	6	8	2	3	5	5	3	3	10	5	5	7	2	3	2	3	6	4	2
4	0	1	1	1	1	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	61	57	47	44	44	57	44	48	46	60	38	41	47	46	56	48	41	49	43	42

るしく強いことを物語っている。また、最少の年は1936～1937年の冬の33日、最多の年は1928～1929年の67日である。夏型のそれが9日と47日であるのに比較して、毎冬、定期的に多く現われるのが冬型の特徴と言えよう。

各冬の合計値の60年間の変動あるいは周期は、あまり明らかでない。多少の波は認められ、5年の移動平均値(図は省略)では1944～45、1945～46、1946～47の極大が明らかであった。個々の月をみると、例えば、いわゆ

る38・1豪雪のあった1963年1月には22日という大きい値が出ており、過去の最多記録である。しかし、気候的にみて、豪雪や低温がかならずしも、冬型の出現頻度の多いことは単純には結びついていないようである。この点に関しては、東アジア全般についての今後の研究が必要であろう。

(b) 年変化

冬型気圧配置であるから、冬に多いことはもちろんであるが、月別に60年間の平均をとると表2の通りである。1月には約14日、2月と12月が約3分の1カ月、冬型気圧配置が現われる。10月にも毎年2日程度現われ、むしろ全く現われていないことの方がめづらしい。10月

表2 冬型気圧配置の月別出現日数 (1907年7月~1967年6月)

月	出現日数	月	出現日数
1	14.2日	8	0.0
2	10.6	9	0.1
3	4.9	10	2.2
4	0.5	11	5.9
5	0.0	12	11.2
6	0.0		
7	0.0	年合計	49.5日

表3 冬型気圧配置の半旬別出現頻度 (%) (1907年7月~1967年6月)

半旬番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
半旬	1/1 1/5	1/6 1/10	1/11 1/15	1/16 1/20	1/21 1/25	1/26 1/30	1/31 2/4	2/5 2/9	2/10 2/14	2/15 2/19	2/20 2/24	2/25 3/1	3/2 3/6	3/7 3/11	3/16
頻度	46	44	43	46	51	44	45	39	47	36	32	26	18	19	22
半旬番号	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
半旬	3/17 3/21	3/22 3/26	3/27 3/31	4/1 4/5	4/6 4/10	4/11 4/15	4/16 4/20	4/21 4/25	4/26 4/30	9/18 9/22	9/23 9/27	9/28 10/2	10/3 10/7	10/8 10/12	10/13 10/17
頻度	10	16	10	3	3	2	1	1	1	1	1	1	2	8	6
半旬番号	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73
半旬	10/18 10/22	10/23 10/27	10/28 11/1	11/2 11/6	11/7 11/11	11/12 11/16	11/17 11/21	11/22 11/26	11/27 12/1	12/2 12/6	12/7 12/11	12/12 12/16	12/17 12/21	12/22 12/26	12/31
頻度	8	11	9	10	20	19	19	20	33	33	32	35	39	38	40

(注：第25半旬から第52半旬の間は頻度0%)

に冬型が、全然出現しなかったのは、表1によると60年間に6カ年だけである。

(c) 半旬別出現頻度

季節予報の資料などには半旬別の集計が必要であるし、前報の気圧配置型ごみの結果と比較する意味もあり、半旬ごとにまとめたものが表3である。

1月は一般に大きい頻度であるが、特に第5半旬の1月21~25日に最多で51%に達する。大寒がこれに相当しよう。第8半旬の2月5~9日は目立って回数が少なく、立春のころの極小値を示している。これは前報でも報告したところであるが、60年間の集計でも同様の結果が現われた。次いで第9半旬の2月10~14日は極大が出て、寒の戻りに相当する。その後、次第に回数は少なくなり、第15半旬、第17半旬に小さい山がある。4月は次第に減少して、5月以降、9月中旬まではまったく出現しない。

秋、9月下旬に冬型気圧配置は出現し始める。10月8~12日、10月23~27日、11月7~11日の各半旬に極大がでる。これらの季節風の吹きだしは、裏日本の山岳の冠雪でこれまでによく知られているところである。例えば、八甲田山の初冠雪は、2日間のずれを許せば、冬型の気圧配置の出現にともなう場合は1910~1965年の間に24回、すなわち43%であった。

(d) 日別出現回数

表4は60年分の冬について、日別にその出現回数を集計したものである。表4の結果からは上記の半月の集計結果をさらに詳しくみることができる。すなわち、1月2日、1月13日、1月20日、1月23日、1月27日、2月12日、2月23日などは、その前日より出現回数が急増し、極大値を示している。逆に極小は、1月10～11日、2月6日、2月14日、2月24日などで、前日より急激に

表4 冬型気圧配置の日別出現総数[(1907～8)～(1966～7)]の60冬の合計。ただし、5～8月は0。

	1月	2月	3月	4月	9月	10月	11月	12月	
1	23	29	12	1	0	0	7	19	
2	32	24	11	2	0	4	5	15	
3	29	27	9	0	0	0	2	26	
4	26	29	8	1	0	2	5	20	
5	29	31	11	4	0	2	8	20	
6	32	18	14	2	0	2	8	18	
7	29	25	10	2	0	1	13	14	
8	30	22	15	0	0	1	10	21	
9	22	20	11	2	0	4	9	21	
10	19	27	12	3	0	6	12	19	
11	16	28	9	0	0	7	17	22	
12	23	36	10	2	0	5	11	20	
13	30	31	14	1	0	4	12	23	
14	28	19	14	1	0	7	12	21	
15	32	22	14	1	0	2	18	24	
16	27	25	15	1	0	4	5	18	
17	31	20	9	0	0	2	15	21	
18	25	22	5	1	1	5	12	25	
19	25	19	5	1	0	4	14	29	
20	31	22	6	0	0	3	10	21	
21	28	19	6	0	0	5	7	20	
22	30	16	11	1	1	7	9	23	
23	37	24	8	1	2	8	11	24	
24	33	15	8	1	0	8	15	27	
25	26	17	8	0	0	5	13	22	
26	23	16	12	0	0	5	12	18	
27	32	17	10	1	0	8	20	25	
28	26	15	5	0	0	3	21	24	
29	27	(4)	5	1	0	3	24	26	
30	23	/	7	0	0	4	14	25	
31	26	/	2	/	/	9	/	20	
計	850	635	296	30	4	130	352	671	2968

減少する。

秋になってからの、明らかな極大は11月11日、11月15日、11月29日、12月3日、12月19日、12月24日、12月29日に出現する。めだつた極小は11月21日、11月30日、12月26日などである。

4. 若干の考察

(a) 冬型が卓越する期間について

上述の通り、冬型が卓越する半月は11月12～16日の半月から現われ、2月15～19日の半月で終わる。この間には、明瞭なシンギュラリティーである1月末あるいは2月初めの冬型が弱まる半月がある。まず、これらの現象について、若干の考察をしたい。

図1は、北半球 500mb 等圧面高度の半月平均値(気象庁 1959)から、30°N と 50°N の高度差(左)と、40°N の高度(右)を10月～4月の間について、前者は90°E～180°、後者は90°E～150°W をとってアイソプレスを画いたものである。また、図の中央には、各半月について、最も卓越する気圧配置型を書いてある。ただしⅠ型は冬型、Ⅱ型は気圧の谷、Ⅲは移動性高気圧型である。型の分類基準について詳しくは前報(吉野・福岡 1967)に記してある。なお、上記の半月平均値は1946～1956年(1954年欠)について集計してあるので、卓越する型の「こよみ」は、それとほぼ同じ10年間の1946～1955年の集計期間についてのもの(吉野・菅沼1967)からとってある。

さて図1(左)をみると、冬型がはっきりと出現し始めるのは10月8～12日の半月であるが、その後、最も大きい値を示す位置(図で1点鎖線)は段階的に西にその位置がずれる。すなわち、10月18～22日の半月には170°Eに移り、11月17～21日には140°Eに移る。その後、冬型が卓越する11月中旬から2月中旬まで、30°と50°Nの差の最も大きな値を示す位置が140°Eにあることがわかる。

図1(右)をみると、40°Nにおける高度の最低の位置すなわち谷(破線)の位置は、明らかなものが130°Eにあり、別に第2の谷が170°W～160°Wにある。この後者の谷が消えて、130°Eの谷が140°Eに移るのが11月27日～12月1日の半月である。冬型はそれ以後連続して卓越するようになる。

このようにして、冬型の走りが現われるのは第2の谷が160°Wから170°Wに移ったときであり、130°Eの主な谷が140°Eに移ったとき以降、冬型が連続して現われる。

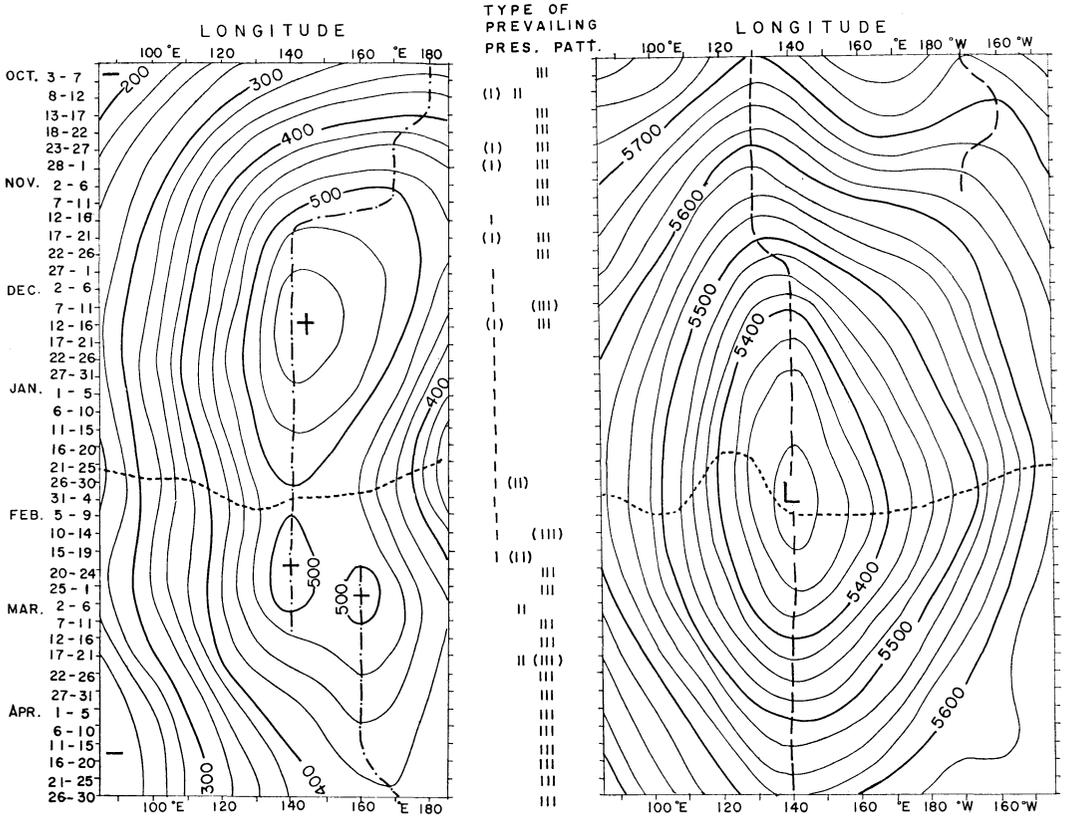


Fig. 1 (Left) Isopleth of height difference (m) of 5-day normals of 500mb-level between 30°N and 50°N. (Right) Isopleth of 5-day normals of 500mb-level (m) at 40°N.

図1 (左) 30°N と 50°N における 500mb 等圧面の高度差 (m) の半月平均値のアイソプレス。(右) 40°N における 500mb 等圧面高度 (m) の半月平均値のアイソプレス。

1月の終りまたは2月の初めに現われるシンギュラリティーについては、40°Nの高度のアイソプレス(図1の右)の図からは、明らかな関連はつかめない。しかし、30°Nと50°Nの高度差のアイソプレス(図1の左)の図からは、若干の関連が指摘できる。すなわち、大きな値(1点鎖線)は連続して140°Eに現われているが、ちょうど1月31日~2月4日その半月に絶対値が小さくなり、その後また大きくなる。このいったん小さい半月となるときが、この10年間については1月31日~2月4日であった。

一方、40°Nの高度のアイソプレス(図1の右)に、最低高度となる半月が点線で記入してある。これを見ると、1月の下旬120°E~130°Eで早く最低高度がでてくる。その理由はわからないが、これも上記のシンギュラリティーと関係があるかも知れない。すなわち、120°E~130°Eで1月下旬~2月上旬に何らかの理由によ

って早く気圧があがるので、冬型が出現しにくくなる結果となるのであろう。

冬型の出現が終ってⅡ型またはⅢ型が出現するのが、2月20~24日の半月からである。この時期については、40°Nの高度(図1の右)、すなわち谷の位置との関連はまったく認められない。しかし、30°Nと50°Nの高度差の図(図1の左)では大きな値(1点鎖線)が、160°Eに、140°Eとは別に、新しく現われるときと完全に一致している。これは極めて興味ある事実と思う。

なお、1年を7つの自然季節に区分した研究(徐・高1962)では、この冬型の卓越する期間についての東アジアの特性について、ほぼ同じ傾向を記載している。

(b) 冬型が卓越する半月の帯状示数その他

上に述べたのは、冬型が卓越する季節の始まりと終り、および一時休止のシンギュラリティーについて、500mb等圧面高度の特性との関連を調査したものであ

表5 冬型気圧配置が卓越する半旬としない半旬の 500mb, 50°N の帯状示数

区 域	3 10~90°E	2 100~180°E	1 90~170°W	0 0~80°W	北半球全体	標本半旬数
冬型のみが現われた半旬	9.8	4.3	13.4	17.0	11.4m/s	10
冬型が卓越した半旬	9.4	6.8	13.1	15.8	11.4m/s	21
冬型がまったく現われなかった半旬	9.9	13.6	11.8	15.1	12.6m/s	23

表6 冬型気圧配置が卓越する半旬としない半旬の 1000~500mb シックネスの北半球平均値

緯 度	20	30	40	50	60	70	80°N	標本半旬数
冬型の卓越した半旬	5653	5556	5375	5237	5142	5052	4960m	14
冬型が卓越しなかった半旬	5667	5566	5399	5232	5125	5038	4973m	20

った。そこで、この冬型が卓越する季節、すなわち11月中旬から2月上旬までの間でも、年によっては冬型が特に卓越しない半旬と、異常に卓越する半旬とがある。こういう現象について、ここで調査した。

北半球半旬平均 500mb 帯状示数(気象庁予報部1965)の値が1949~1962年について計算されているので、筆者らの「気圧配置型ごよみ」から、冬型のみが5日間続いた半旬をこの期間から選びだし、その平均値を求めた。また、卓越する半旬としては、上期の5日間続いた半旬(これは10半旬しかなかったのに、4日間は冬型であった半旬も加えると、そういうのは21半旬となったが、その平均値を求めた。また、まったく冬型が現われなかった半旬は23半旬あったが、その平均値も求めた。

その結果は表5の通りであるが、区域2(100°E~180°E)において、特に、冬型のみが現われる半旬と、まったく現われない半旬との差が大きい。この表の値は、40°Nと60°Nの高度差から50°Nにおける地衡風に換算してあるものである。北半球全域の平均では、差はあまり大きくはないが、冬型が卓越、もしくは全部冬型の半旬では、やはり帯状示数は小さくなっている。しかし、地域0(0~80°W)、すなわち大西洋の部分では示数が大きくなっていて、対照的である。

区域2、すなわち東アジアの部分で、冬型のみが現われる半旬、または卓越する半旬で、示教が小さいのは、図1の左の現象とはむじゅんするようにちょっと考えられるが、そうではない。すなわち、図1(左)は高度差のアイソプレスではあるが、地衡風もほぼ同じになると考えると、冬型が卓越する期間は、図1(左)で500mの等値線がでている時期だから、地衡風が強いことになるからである。しかし、よくみればこれはあくまでも140°E付近だけに限ったことであって、100~180

°Eの平均ではない。むしろ、冬型の最盛期である1月から2月上旬にかけては、東西から小さい値がせまっている。

また、図1(左)で問題にしたのは、その大きい値(1点鎖線)のでる位置の季節の変化である。これに対し、この表5の値は半旬的現象で、時間スケールの小さい現象と理解してもよからう。

ついでながら北半球平均の1000~500mbのシックネスを冬型が卓越する半旬(4~5日冬型が現われた半旬)と、卓越しない半旬(0~1日冬型が現われた半旬)にわけて求めると、表6の通りである。20~40°Nでは卓越しない半旬が厚く、50~70°Nでは卓越しない半旬がうすい。表5の北半球全体の傾向と一致しているが、このような低緯度と高緯度の傾向の差は興味がある。

なお、表5の特性は1954年1月の低温を解析した際(須田1956)にも認められている。すなわち、強い偏西風帯があって寒気の南下をさまたげている間は南北混合が弱いから、その北方で寒気の蓄積が続き、偏西風が弱くなると寒気が南下した。また表5のように東アジア平均で風が強いことは偏西風が東西方向をとっていることであり、風が弱いことは北西からの方向をとっていること(谷がとがっていること)をも意味するから、後者の場合には低温となり(吉野1968a)、地上では季節風の発達する、いわゆる冬型気圧配置のときと理解することができる。また、表6に示された、「低緯度と高緯度のシックネスの傾向が冬型が卓越する半旬としない半旬で異なる」ことと同じ特性が、500mb面高度偏差、あるいは地衡風の東西成分の子午線プロファイル(Suda1959)にも示されている。

あとがき 本調査と対をなす夏型気圧配置については、別の報告(吉野1968b)を参考にしていただきたい。

参 考 文 献

- 1) 荒川季俊・田原寿一(1948): 気団ごよみ. 気象集誌. **26**, 201-202.
- 2) 気象庁(1959): 北半球 500mb 等圧面高度半旬平均値. 43p.
- 3) 気象庁予報部(1965): 季節予報資料 [季 444 の 2] 31-44.
- 4) 倉嶋厚(1966): 日本の気候(古今書院) 253p.
- 5) 徐淑英・高由禱(1962): 東亜季風と季節. 「東亜季風の若干問題」88-103.
- 6) 須田建(1956): 1954年1月末の低温について. 研究時報 **8**, 226-232.
- 7) Suda, K. (1959): A study on the dynamic climatology of cold outbreaks in the Far East. Geoph. Mag. **29**, 413-461.
- 8) 高橋浩一郎(1955): 動気候学(岩波書店) 316p.
- 9) 吉野正敏(1967): 気圧配置型ごよみ(4) — 西高東低について—災害科学研究会プリント.
- 10) 吉野正敏・福岡義隆(1967): 半旬別の気圧配置ごよみ. 天気 **14**, 250-255.
- 11) 吉野正敏・菅沼繁(1967): 気圧配置型ごよみ(2)(1946-1955)改訂版. 災害科学研究会プリント.
- 12) 吉野正敏(1968a): 気候学(地人書館) 258p.
- 13) 吉野正敏(1986b): 東アジアの夏型気圧配置の出現状態およびその異常と気温分布. 地理学評論 **41** (12) 721-731.

= 新刊紹介 =

関口 武著 日本気象風土記

旺文社新書 252頁 250円

わが国では、あいさつの言葉一つをとつても、日常生活に及ぼす気象の影響の大きいことがわかれると言われている。そのためでもあろうか、日本の天気や気象に関する解説書や教養書は、これまでもかなりの数になる。しかし、わが国の気象の変化は時間的ばかりでなく、地域的にも極めて大きく、このような地域差が特色のある風土を作り出し、そこで育った人々に郷愁をよび起こさせているにもかかわらず、このような点を重視して記述された教養書は意外に少ない。一般の人は知らず知らず、自分自身の生活の場所が頭の中の主要な部分を占めているのではないだろうか。

本書では、この点を重視し、わが国を北日本・東日本・中央日本・西日本に四分し、それぞれの地域に関係なく、気象現象や天気図の見方などを解説している。たとえば、冬の季節風といっても、北日本と北陸以南とは若干その性質を異にするので、別々に取り扱うというような配慮がされていることが本書の第一の特徴である。

また単なる気象現象の羅列に止まらず、たとえば、北日本の冬の寒波を“ごしきぼっこ”の民話やこけしづく

りと結びつけ、さらに砂丘とそれを作り出したタマカゼの由来をとき、季節風と漁民文化を結びつけるというように、巧みに風土と気象を結びつけたところに本書の第二の特徴がある。しかも丑寅鬼門説・おぼろ月夜などの民間伝承や季語などに科学的解説を加えるばかりでなく、大気大循環や気象衛星に関する知見など新しい気象学の片鱗をも加えて、日本の気象風土記を通じて、気象学の一般教養を与える気象学の入門書としての配慮がなされている。ただ、頁数の割合に多くの内容を盛りこんだために、もう少し詳しい解説をほしいと感じる部分があるのは残念である。

本書の第三の特徴は読みやすいことである。旺文社新書という、学生一般を対象とする読物であるだけに、ユーモアのある砕けた文体で肩がこらず、まことに楽しく読める。したがって気象人の息抜きもよいが、気象学に全く無縁な一般の人々の教養書としてよく、また文科系を含めた大学教養コースのテキストとして使いやすい書物だと思ふ。

(河村 武)